

心理学における質問紙調査に対する 研究参加者のしろうと理論

長 内 優 樹 内 間 望

アブストラクト：

現在、日本の心理学において質問紙調査法は、実験法よりも多く用いられている。質問紙調査法において、研究参加者の負担の軽減は、研究者が遵守すべき倫理的配慮の代表的な事項といえる。そこで本研究では、典型的な質問紙調査法の実施（ $N=403$ ）の際に、「あなたが考える改善案」として、回答の負担に関する事項を間接的に把握するための質問項目を設けた。本研究で、この質問項目への回答を分析した。その結果、「質問項目数が多い」「意味的に重複する項目が多い」といった回答が多くみられた。これは、質問紙調査における心理尺度の構成においては、ある程度は必要条件とされるものであるが、心理学専攻の研究参加者においても同様の回答傾向がみられた。こうした結果は、学術上は正統とされる質問紙調査法についての論理と、研究参加者が回答時に容認可能な調査の形式（本研究では、質問紙調査に対するしろうと理論と呼ぶ）に隔たりがあることを示唆している。

問題と目的

心理学における代表的な研究方法は、実験法と（質問紙）調査法に大別される。歴史的には、心理学は実験法を用いることで、研究とその結果に実証的な根拠を付加し、科学性を主張してきた。この実験法の使用による科学性の主張は、学術界における心理学の立場を強め、大学において単独での学部や学科の設置が可能である程の発展をもたらしたと言える。このように心理学における実験法は、心理学の発展に欠かすことのできない研究方法であり、現在においてもその代表性および有用性は揺るがないが、学部生・院生を含めた心理学研究に従事する者が用いる研究方法としては、その数は調査法に劣る。これは、実験法が因果関係の検証を目的とした研究方法であり、従属変数に及ぼす独立変数の影響を

厳密に検証するために、剰余変数として想定しうる変数の統制に気を配ることに代表されるように、実施上のコストが多くかかることが原因であるといえる。それに対して、調査法は、多くの場合、既存の心理尺度を複数選択することで実施でき、得られる結果は相関関係であるため、実施におけるコストの低さや、得られた結果の解釈の多義性の高さが好まれていると考えられる¹。調査法では、研究参加者（調査回答者）の募集も実験法に比べて多くの場合、容易である。従来は大学の講義の時間の一部を用いて研究参加者が募られることが多く、その場で回答をもとめることも少なかった。近年は、インターネットで回答が可能なWeb調査も普及し、実施上のコストは研究者、研究参加者の双方ともにますます下がりつつある。このような理由から、調査法は心理学の研究において、現在多

く用いられているが、その実施における注意点の一つとして欠くことのできないことが、研究参加者への負担に対する配慮である。これは倫理的配慮の一種として、心理学では周知されていることといえる。例えば、日本心理学会による倫理規定（2009）によると調査研究では、「研究者の観点からだけでなく研究対象者の観点からも、それらの項目が内容的にまた形式的に適切であるかどうかを検討する必要がある。（P.12）」とされている。そのため、本研究では典型的な調査研究の実施の際に、その負担を把握するための項目を付加し、研究参加者の負担を把握することを目的とした。

方 法

研究参加者

関東圏内の4つの私立大学に所属する大学生403名を研究参加者とした。属性は、心理学系学部所属する者が168名、非心理学系学部所属する者が235名であった。心理学系学部か否かの分類には、各学部のカリキュラムポリシーを参照し判断した。属性として心理学系学部か否かを設定した理由は、質問紙調査についての知識を有する者とそうではない者では回答に違いがあることが想定されるためである。

調査方法

調査は2021年7月に実施した。実施方法は、インターネットに接続されたスマートフォンもしくはPCを使用したWeb調査であった。

質問紙

質問紙は下記の尺度および質問項目で構成

した。1) 内間・小野寺（2021）による将来考案力尺度（16項目、5件法）、2) 白井（1994）による時間的展望体験尺度（18項目、5件法）、3) 益田（2008）によるキャリアアダプタビリティ尺度（18項目の中から14項目を選択、5件法）、4) 杉浦・馬岡（2003）による認知的統制尺度（11項目4件法）に加えて、5) 「回答時に気づいた改善点を入力してください。あなたなりのアイデアでかまいません。」という教示による自由記述回答形式の問を上記質問紙に回答後に、別のフォームで回答するように求めた。

倫理的配慮

著者の所属機関に設置された研究活動推進委員会において倫理審査を受けた。また、調査は日本心理学会調査倫理に関わる注意事項に遵守し作成され、調査の任意性や回答を拒否した際に不利益がないことを説明のうえ、研究参加者から同意を得たうえで調査を実施した。調査への参加に同意した研究参加者には、回答フォームの1ページ目にチェック欄を設け、その旨を任意で記入させた。

結 果

分析には樋口（2014）によるKH Coder 3を用いた。まず、属性を分けずに、データクレンジングを目的として、全データで以下の分析を行った。例えば、「質問内容」が「質問」と「内容」に分かれて抽出されないように、強制的に1語として抽出すべき複合語がないかを確認するため、複合語の抽出を行った。続いて、複合語の抽出で得られた語をもとに、語の取捨選択を行った。強制的に1語として抽出すべき複合語は、強制抽出リスト

¹ 通常、研究において結果の指す意味は一義的であることが望ましいことであるのは当然であり、実証研究における結果は仮説が支持されたのか、されなかったの二種に限定される。ただし、学部生・院生が行う研究において、それは時に自身の仮説設定能力の低さを突きつけられることに他ならず、卒業論文や修士論文のような研究活動の終結期限が定められている場合には、多義的な理解が可能である調査法が好まれるのであろう。

に登録した。さらに、質問項目への質問（例えば、○項目目の漢字が読めない、など）は分析から除外した。そして、使用しない語として「思う」「感じる」を指定した。これは、質問紙への感想をもとめる教示のもとで調査を行っているため「思う」「感じる」の語数が多くなり、共起ネットワーク図を作成する際に、これらの語が中心になり、本来明らかにしたい特徴が捉えにくくなる可能性が大きいと判断したためである。最後に、以下の語は、いずれも同じ文脈の中で使われている単語だったため、表記ゆれの修正を行った。表記ゆれの修正を行う際は、もとの文章（回答）を確認して行った。「少し」と「もう少し」

を「少し」に、「改善」と「改善点」を「改善」に、「質問」と「質問内容」と「内容」を「質問」に、「男性」と「女性」と「男女」を「男女」に修正した。

属性別の共起ネットワーク分析の実施に先立ち、抽出語リストを頻出語上位150語で作成した。そして、共起ネットワーク分析を行った。集計単位は段落とし、最小出現数は6語とした。これは、抽出語リストを参考に、5以下の語句を含めると特徴が掴みづらいと判断したためである。そのため、頻出数6以上の抽出語を属性別にTable 1および2に示す。また、共起ネットワーク分析の結果を属性別にFigure 1および2に示す。

Table 1 心理学系学部における頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
質問	100	似る	14	性自認	8
回答	73	人	14	選択	8
選択肢	54	選ぶ	13	結果	7
考える	46	性別	12	行動	7
多い	41	項目	11	今	7
自分	29	最後	11	質問文	7
少し	26	場合	11	文章	7
良い	22	数字	11	問題数	7
答える	21	前	11	実際	6
ページ	20	途中	11	出る	6
アンケート	19	意味	9	少ない	6
当てはまる	18	時間	9	状況	6
分かる	18	書く	9	説明	6
問題	17	必要	9	長い	6
将来	15	過去	8	読む	6
男女	15	言葉	8	聞く	6
欄	15	作る	8	変える	6
改善	14	準備	8		

Table 2 非心理学系学部における頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
質問	124	悪い	11	部分	8
考える	85	具体的	11	勉強	8
自分	64	行動	11	曖昧	8
回答	62	書く	11	可能性	7
将来	42	不安	11	過去	7
多い	36	出来事	10	気づく	7
少し	31	理解	10	言葉	7
選択肢	27	結果	9	今	7
アンケート	24	見る	9	似る	7
良い	22	準備	9	状況	7
分かる	20	選ぶ	9	前	7
特に	19	想像	9	データ	6
改善	18	未来	9	傾向	6
ページ	17	持つ	8	自信	6
意味	17	時間	8	選択	6
答える	16	直す	8	大きい	6
聞く	15	当てはまる	8	大事	6
人	14	難しい	8	必要	6

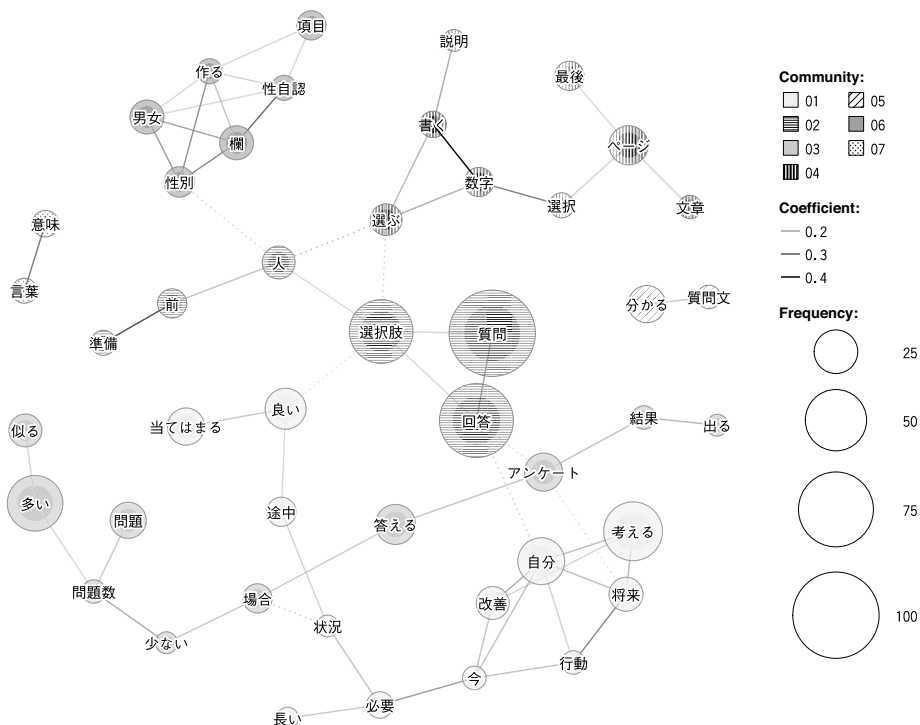


Figure 1 心理学系学部の回答の共起ネットワーク分析

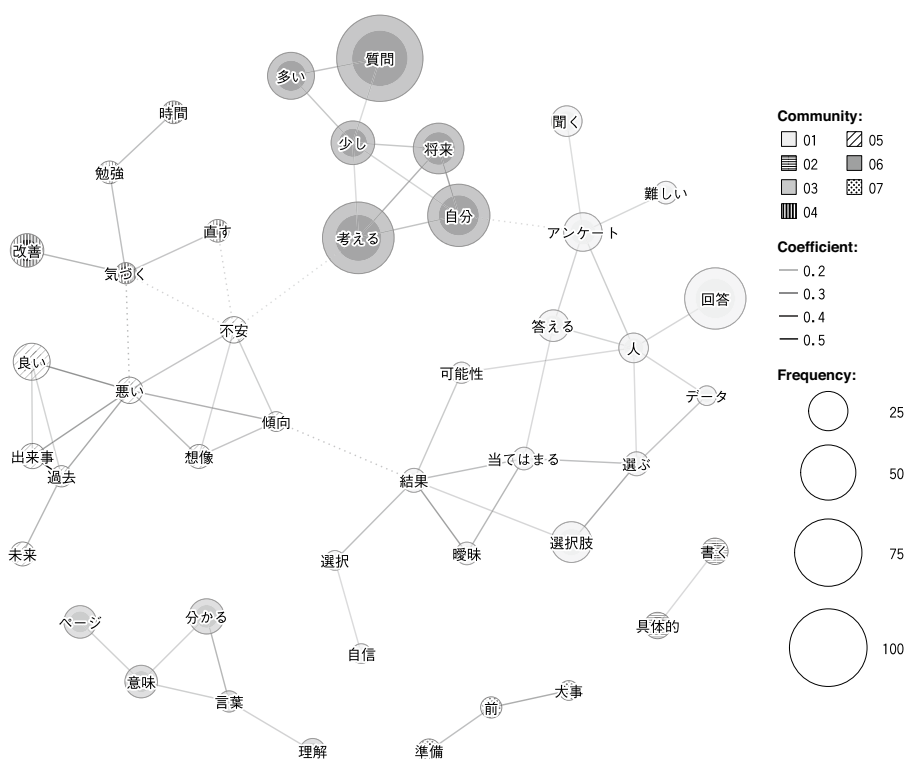


Figure 2 非心理学系学部の回答の共起ネットワーク分析

考 察

本研究は、質問紙調査研究における研究参加者の負担を把握することを目的とした。自由記述回答の共起ネットワーク分析によって、心理学系学部もしくは非心理学系学部という属性の違いに関わらず、「多い」という語が、質問項目数を意味する語と共起していた。また、多様な表現によるため頻出語や共起ネットワーク分析には表れなかったが「同じような内容の質問がいくつかあったかな」と思いました。」などのように意味的に重複する項目が多いことを指摘する回答も多かった。こうした回答傾向からは、属性に関わらず「質問項目は少なく、意味的に重複する項目が少ない方が、望ましい調査である」とする心理尺度を用いた質問紙調査に対するしろうと理論の存在が想定できるだろう。ただ

し、「選択肢」という語も頻出しており、その回答をみると、回答の選択肢（件数）を増やすこと、または、減らすこと、もしくは、質問項目毎にその文言も変えることなど、多様な回答がみられた。そのため、単に項目数が少なく、意味的に重複しないだけではなく、回答時に答えにくい表現や形式に負担を感じるという仮説も想定される。無論、心理学の学術研究上の手続きとして、必要である形式や表現もあるが、それは、学術上は正統とされる質問紙調査法についての論理と、研究参加者が回答時に容認可能な調査の形式に隔たりがあることを意味している。また、本研究では、共起ネットワーク分析を用いたため、自由記述回答が持つ文脈情報を分析から欠落してしまっている。そのため、回答の単純なカテゴリー分類など、文脈情報を損なわない形での分析を今後行う必要がある。

引用文献

- 樋口耕一 (2014). 社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して ナカニシヤ出版.
- 日本心理学会 (2009). 公益社団法人日本心理学会倫理規定.
- 益田 勉 (2008). キャリア・アダプタビリティと組織内キャリア発達 「人間科学研究」文教大学人間科学部, 30, 67-78.
- 白井利明 (1994). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, 65 (1), 54-60.
- 杉浦知子・馬岡清人 (2003). 女子大学生における認知的統制と抑うつとの関連 健康心理学研究, 16 (1), 31-42.
- 内間 望・小野寺敦子 (2021). 大学生を対象にした将来考案力尺度の作成の試み 日本心理学会第85回大会発表抄録集, 188.